声なきメッセージ

仙台教区　白木澤（しらぎざわ）　琴（こと）

「今度、お仕事で文章を書かなきゃいけなくて、どうしたらいいんだろう？」

いつもお寺に遊びに来てくれる中学生の女子たちに泣きつきました。すると、「お坊さん」や「お寺」の話、「死」について思うことなどを書いたらどうかなど、沢山のアドバイスをくれました。

「死って、怖いとしか言えない！でも自分もいずれは体験する悲しいことだと思う」

「知ってる人が死んだら、悲しいから、できれば死は来てほしくないなー」

中には、おじいちゃんを亡くして、一週間以上泣いてばかりいたことや、留守中にペットが亡くなり、きちんとお別れできなかった苦しさを話してくれた子もいました。

「死」について、たくさんの気持ちを子どもたちが抱えていて、悩んでいたということを教えてくれました。「死」ということは私自身もわからなくて逃げたくなるけれど、お坊さんとしてお参りしているときに感じた「死」のお話をしたいと思います。

ある日、私の友達のおじいさんが亡くなりました。お散歩をしに出かけて倒れ、突然に亡くなってしまったのです。

枕経のおつとめに伺うと、静かなお部屋に、友達とそのご家族がいて、亡くなられたおじいさんは真っ白なお布団をかけられて横になっていました。緊張しながらお経を読み始めると、家族みんなの小さな泣き声が部屋中に広がりました。

子どもたちと聞く法話

おつとめが終わってからのことです。友達と一緒に、おじいさんの枕元へ行き、亡くなられた姿にお会いしました。眠っているような優しいお顔。私は頭にそっと触れて、「お疲れ様でした。有難うございました」と、語りかけました。するとそれまで後ろで座っていた友達は、目にたくさんの涙を浮かべて、恐る恐る、おじいさんのほっぺたに触れました。そしてゆっくり頭をなで、こらえていた涙を流して大声で泣きながら、おじいさんのほっぺたを包み込むように、何度も何度も触れたのです。

亡くなられたおじいさんの、ひんやりして、柔らかくないほっぺた。

さすっても起きてくれないし、返事もしてくれない。それでも、残された大切な家族の悲しみを、静かに、全部まるごと受け止めてくれているように感じました。

どれくらい時間が過ぎたでしょうか。だいぶゆっくり呼吸が整ってきた友達は「おじいちゃんの頭なでたの初めてだった」と、ちょっとだけ笑顔を浮かべて話してくれました。

私たちに命がけで「死」を教えてくれたおじいさん。私にもみんなにも「死」は必ずくる。それは今日か明日かはわからない。だからこそ、「今を大切に精一杯、精一杯生きようね」そんな声なきメッセージを、おじいさんからいただいたような気がします。

南無阿弥陀仏

蓮ちゃん通信 その②

絵本100冊プレゼント応募受付中！

お寺の子ども会で絵本を活用してみませんか？
詳しくは、10月末の寺院・教会定期直送便同封の応募要項、もしくは青少幼年センターホームページをご覧ください。
〔2015年12月18日㈮ 応募〆切〕

東本願寺　青少幼年センター　検索